



ある事情



川崎ゆきお

ホールのように広い喫茶店での話だ。真冬なのに扇風機が回っている。喫煙してもいい場所なので、換気のためだろうと高橋は思った。だが、換気扇は壁側に二台ある。ではこの扇風機は何だろう。やはり換気目的、空気をかき混ぜるため、回しているのだろうか。四枚羽でカバーはない。一枚一枚の羽はよく見える。回転していても見えるので、ゆっくりと回っている。その下、プロペラの付け根に月のような電球がぶら下がっている。後付けではなく、一体型だ。しかし、天井には蛍光灯がかなりの数埋め込まれている。照明としての実用性は低い。白熱灯のため、電球を取り替える作業が大変だろう。ホールのようなその喫茶店は天井が高い。普通の住宅の二倍近い。高橋が、ずっと扇風機を見ていると、横のテーブルでケータイを弄っていた中年男が、何やら言い出した。「事情が分からないと、本質を見失う。世の中はそんなものだ。情報戦争だよ、知らないと損をする。失敗する。分かるね」真空管が切れた親父ではないかと高橋は無視する。「あの扇風機は店のものではない。確かに店の持ち物だ。備品だ。しかし、喫茶店のアクセサリとして取り付けたものではない。ここが誤解の始まりだ。実はこの箱はお洒落なブティックだった。それが潰れて、扇風機だけ残して立ち去った。次に借りたのがこの喫茶店だ。だから、扇風機は改装前からあった。喫茶店が取り付けたものじゃない。残しておいてもらったんだ。それはね、取り外しに工賃が掛かるからだよ。それに取り外すと天井に穴が空く。だから、穴ふさぎなんだ。喫茶店が、あれを取り外すことは簡単だ。しかし天上に空いた穴にカバーを付けると、不細工だ。それだけのことなんだ」中年男は、それだけ言うとケータイに目を戻した。「よくご存じですねえ」高橋は、その説明に対し、礼を言ったつもりだ。感心しましたと。「なーに、事情さえ分かれば迷わない。世の中、この種のトラップがある。知る者にとっては何でもないことだが、知らない者はいろいろ解釈を試みる。それで、間違った判断を下すこともある。そういうことだ」「何か、その種のお仕事をされているのですか」「あらあら、私の誘いに乗っちゃいけませんよ。だって、私は山師ですからね」「山師って、山仕事の人ではないですよ」「うんうん、いい感覚だよ。君。そういう人間はだませない。だから、私は君に何も仕掛けないよ」「どうしてですか」「だって、そうだよ。私が凄い金儲けの方法を知っていたとしよう。するともうそれを実践しているはずだ。だったら、こんな安い喫茶店で、コーヒーなど飲んでいないよ。それにもう小一時間ここに居る。暇なんだよ。だから、私が語る金儲けの話は嘘になる。懸命な君なら、分かるだろう」「それはネタばらしですか」「ネタの手前をばらしているだけで、ネタ本体にはまだ語っていないよ」高橋は深入りした。「ネタ本体って、どの方面ですか」「方面」中年男の口がほころんだ。「方面ねえ。方面。まあ、それも問い方の一つだ」「どの方面でしょう」「いやいや、私自身がしくじったので、教えると、君も被害を受ける。損をする。そんな損をするようなことを教える気はない。ただ、このコンテンツには将来性がある。私はしくじったがね。まあ、大した損出じゃないから、こうしてまだ喫茶店で座られる」「電子書籍の出版をやるとか」中年男は腹を抱えて笑い出した。非常に可笑しかったのだろう。「違う。違う」「じゃ、どの方面ですか」「私は不動産関係だ」「ああ、じゃ、僕は全く未知です」「そうだよ」「でも、金儲けのネタをコンテンツというものでしょうか」「コンテンツとは内容だよ。ネタの内容という意味だ」「あ、はい。分かりました」「じゃ、私は失敬するよ」中年男は立ち去った。何か企てているようだが、今日は調子が悪いのか、シゴ

トをする気がないようだ。 高橋は引っかからなかったのだが、詐欺師の事情までは分からない。 了